

## イギリスの一般市民への動物実験に関する 情報発信の状況 訪問調査研究の報告 (I)

### — 市民へ動物実験の理解を促す活動団体“UAR” —

加隈 良枝 (帝京科学大学)、久原 孝俊 (順天堂大学)、笠井 憲雪 (東北大学名誉教授)

#### 1. はじめに

私たちは「動物実験の社会的理解を得るための情報発信のあり方についての研究」というタイトルで、2016～2018年度日本学術振興会科学研究助成基盤研究(C)(代表笠井憲雪)の補助を受けた(JSPS科研費JP16K07080)。これは、日本では動物実験について実施者側から一般市民への情報発信が極めて少なく、一般市民の動物実験への理解が乏しいとの認識のもと、情報発信の現状を調査し、効果的な情報発信の方法を研究し、提言することを目的とした。6つのサブテーマの一つは、「海外の動物実験の情報発信法を調査研究し、我が国の情報発信法の改善を行う」ことであり、2018年8月29日から9月6日にかけて研究班員の加隈、久原、笠井の3名が英国の関係機関を訪問調査した。

訪問先は、UAR (Understanding Animal Research)、RSPCA (王立動物虐待防止協会)、オックスフォード大学、NC3Rs (英国3Rs研究センター)、FRAME (医学実験における動物代替のための基金)の5カ所である。このうち、UAR、RSPCAおよびNC3Rsはそれぞれ研究者に対する動物実験の適正な実施

のための情報の提供や一般市民への啓蒙活動を行っており、オックスフォード大学も、積極的な情報公開を行っている動物実験の実施機関として知られている。一方FRAMEの目的は、医学研究において“Replacement”を推進することであり、代替法を中心に研究を行なっている。

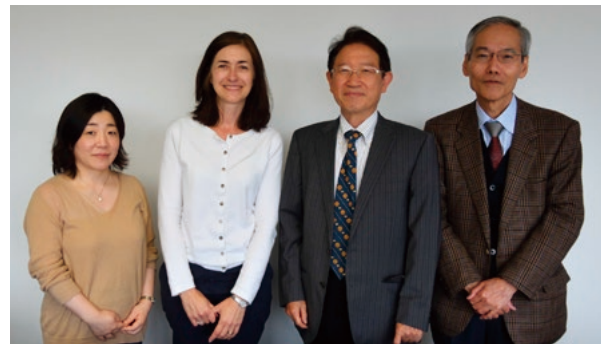
これから本誌に4回にわたって我々が見聞きしてきたイギリスにおける動物実験情報の一般市民への発信の状況を報告する。

なお、訪問した5つの機関は、全て私どもの訪問を前にしっかりとした準備をしていただき、当日は対応いただいた各担当者とも十分な時間を費やして説明していただいた。この場をお借りしてお礼を申し上げます。

#### 2. UAR (Understanding Animal Research): 市民へ動物実験の理解を促す活動団体「動物実験の理解」<sup>1)</sup>

##### (1) UARとは

2018年8月30日午後、英国ロンドンに拠点をおくUARを訪問し、英国の動物実験実施者側が



Wendy Jarrett氏(左から2番目)と筆者ら(ロンドンUARにて)

動物実験に関する一般市民の理解を促すために、この団体がやっている活動について情報収集を行い、わが国の現状についても紹介し、意見交換をおこなった。

UARの本部はロンドン市中心部のオフィス街にあり、地下鉄Farringdon駅に近い小規模なオフィスビルの1フロアを占めており、デスクや資料の並ぶスタッフルームと、10名程度が会議を行うことのできるミーティングルームから成っていた。今回は、代表(Chief Executive)であるWendy Jarrett氏に対応していただき、3時間ほどの会合をもった。

UARは動物実験に関する社会の理解を推進するための活動を行うのが目的の組織であるため、英国に多く存在する慈善団体(チャリティ)のように見えるが、非営利組織ではあるものの、そ

の活動目的を達成するためにチャリティではなく、互助団体のような組織形態をとっていることであった。そのため運営資金のほとんどは会員組織からの会費に依存しており、寄附は可能だがそれほど多くを占めていない。動物の使用規模や動物実験ライセンス所持者数に応じて、概ね3段階の会費を設けているが、会費の額は4万5千ポンド（約63万円）から3百ポンド（約4万2千円）まで幅広く、個々に相談の上決定するシステムとなっている。

そもそもUARが設立されたのは2008年末のことであり、100年以上の伝統があり研究を擁護する活動を行っていたResearch Defense Societyと、2003年頃から市民に向けて研究への理解を推進するための活動を行っていたCoalition for Medical Progressという2つの団体が合体したものである。これらの団体は元々動物実験に関する活動を行っていたが、名称からはわかりにくかったことから、新しい団体は目的がわかりやすい名称となった。設立時から100以上の会員組織が加わっており、多くは大学や製薬企業、その他に研究受託企業、患者団体、実験動物繁殖業者等が含まれている。

代表のJarrett氏の専門は科学ではなく、ずっとコミュニケーションを専門として働いてきた経験をもつ。その他のスタッフには、元研究者の2名、元生物教員の1名、オックスフォード大学の動物実験施設設立をサポートするキャンペーンを行っていた人、政策キャンペーンを専門とする人、博物館でアウトリ

ーチを専門としていた人等10人から成る。

動物実験の3Rを推進するといった活動をしている団体には英国内だけでもいくつもあるので、その違いを尋ねると、UARはRSPCAやNC3Rsとは協働しており交流があるが、FRAMEは動物実験に反対する立場の組織であり、動物実験代替法に焦点をあてているので、協働することはないということだった。また、実験動物学会LASA（The Laboratory Animal Science Association）や、動物飼育スタッフの職能団体であるIAT（The Institute of Animal Technology）、実験動物獣医師会LAVA（The Laboratory Animals Veterinary Association）等とは関わることは多いとのことだった。なお、我々はRSPCA、NC3RsおよびFRAMEも訪問しており、後に紹介する。

## (2) UARの活動の方針と実態

UARは動物実験に対する理解を推進するという目的を達成するため、教育、政治、コミュニケーションの3つの分野についての活動を展開している。

### ① 教育

主にセカンダリースクール（日本の中学高校にあたる）の生徒を対象として、教育活動や施設見学の実施により動物実験への理解を深めようとしている。これは、若い子供ほど動物実験に反対するが、成人になるにつれてその実施意義を認め、動物実験を賛成するようになる傾向が一般的であるということが知られているので、若い子供たちが動物実験について正しい理解を

もってもらえるような活動を展開している。

具体的には、研究者や動物実験技術者による学校訪問を年間300件ほどアレンジして実施している。訪問活動は交通費支給のみのボランティアであるが、全国に500名ほどの登録者がおり、学校からの希望に応じて学校を訪問し、動物実験の実際や行う理由について話す機会を提供している。講師を希望する人には最初はUARが研修を行う。

この学校での講義は人気がある。というのも、理科や倫理の授業の一環で、議論の課題として遺伝子組み換え、中絶等のような社会的に論争となっている問題について学ぶというテーマのなかで、動物実験が取り上げられることも多いためである。活動開始直後は学校あてに案内状を郵送するなどしていたが、実施経験のある学校からは定期的に希望が届く。また、学校で教師や生徒自身が学べるような動物実験に関する教材や情報の提供をウェブサイト上で行っている。

さらに、希望者に向けて動物実験施設の見学ツアーも開催している。本人の希望と保護者の同意のうえで参加するが、生徒は当初はつらい経験をすることを想像しているが、いざ実際に訪問して実験動物の飼育状況を見たり、スタッフの話聞くことで、動物の世話が行き届いている様子や、スタッフの熱心さを知って、非常に良い印象をもつものである。労力がかかるため年間10～12件程度の実施である。

## ② 政治

UARは政府や政治家、および政党との情報交換を頻繁に行っている。たとえば選挙の際に、候補者や政党がマニフェストの中で安易に得票を狙って「動物実験の禁止」などと訴えることがありうる。そういう方針は人気を得られやすいが、それはどういうことなのか、たとえば医療や獣医療の立ち遅れなどにつながりうるといった動物実験を禁止することの影響について丁寧に説明して回るといった活動を行っている。このような活動は表立ってはわかりにくいものだが、舞台裏でUARが団体として熱心に取り組んできたものでもある。その効果で、過去2回の総選挙ではそのような文言をマニフェストに掲げる候補者は出なかったとのことである。

動物実験の適正な規制については、ほかにもヨーロッパレベルでの活動等も展開している。ただ、現在とこの先しばらく、議会はBREXIT(英国のEU離脱)問題に大いに時間をとられてしまうことが予想される。BREXITの影響は動物実験業界に波紋を与えることも予想されている。たとえば各動物実験実施機関には管理獣医師が必要であるが、英国内の獣医大学では実験動物分野に就職しようとする学生が少ないこともあり、現在動物実験管理獣医師として働いている獣医師の約半数は英国以外のEU出身者である。このため英国がEUを離脱することでこれら獣医師が確保できなくなるおそれも考えられている。

## ③ コミュニケーション

UAR設立当初は、テレビや

新聞などのマスメディアにおいて、動物実験を擁護する立場をきちんと主張する機会を増やすように活動していた。最近ではインターネットやソーシャルメディアでの発信も大きな影響をもたらすようになってきていると考えられる。動物実験に反対するアニマルライツ派が、動物実験を行っている大学や組織等を相手取り、時々事実ではないことを主張する事があったが、そういう場合に、公正な立場をとる報道機関であれば、通常は両側の意見をきき、事実にもとづく報道にするものである。そこで、UARはバランスをとり動物実験を支持しその意義を主張するという活動も積極的に行っている。

UARは、動物実験の情報開示のための共同声明(Concordat)<sup>2)</sup>(詳細は次回紹介)が策定されて以来、報道において動物実験に関する正しい情報を公開し、その意義を訴えるという姿勢を明確にしており、これにより各メンバー組織が自信をつけ、自らの主張をアナウンスする事も増加してきている。

開示に関連する活動として、UARはウェブサイト上で動物実験施設のバーチャルツアーも開設している<sup>3)</sup>。多くの組織に参加の可否を尋ねた結果、参加を決めた大学や研究所が画像を提供している。アクセス人数の把握はできているが、このサイトを見た人の認識がどのように変わったのか、といった調査を行うことは今後の課題である。

また、UARは会員

組織が自らコミュニケーションや情報開示を推進するために役立つセミナーの開催も行っている。たとえばテレビやソーシャルメディアでの発信に際しての注意事項や、難しいテーマに関するディベートの方法、携帯電話での動画撮影の方法などについての内容が含まれている。さらに、動物実験の実際や必要性について説明するリーフレットも作成し、配布している。

現在はこのような問題は世界規模で伝わりやすくなっていることもあり、対策は世界各地で共有できると良い事から、今後日本の実験動物界との情報交換をしていくことを話し合った。

なお、UARが中心となって2012年10月に英国のバイオサイエンスに関わる40以上の組織が動物実験の公開に関する宣言に署名したが、これは現在“the Concordat on Openness”として知られている<sup>2)</sup>。これについては次回に紹介する。またWendy Jarrett氏は2020年5月に大阪で開催される第67回日本実験動物学会総会のシンポジストとして来日される予定である。

## 参考情報

- 1) UARのWebsite: <http://www.understandinganimalresearch.org.uk/>
- 2) Concordat on Openness: <http://concordatopenness.org.uk/>
- 3) 360° 実験動物ツアー: <http://www.labanimaltour.org/>



Wendy Jarrett氏(右端)の説明を聞く(UARのオフィスにて)